

西洋易知錄

四
五

第
368
分

10 15 20 25 30



西洋易知録卷之四上

第四世紀

第一篇 十字戦り事

要紀元千零九十九年西人耶路撒冷ゼリユサレムを取とり千八百八十七年回王サラヂサラヂン又之を取とり千二百二十九年和時トクより此城又西人あり有とふトルコ三千二百三十九年土身其人トルコ之を取とり

河津孫四郎

譯述



明治四辛未年二月十三日五六冊末之

抑亞細亞の一都耶路撒冷を耶蘇教の興りし所なれば
 耶蘇教を奉るる人を此地より行く者多かりし然るに紀
 元千零九年回く教の王ハッケム其寺院を滅し耶蘇の
 墓を壞ち遂に土身其人を以て耶路撒冷を守らしめ許
 多の參詣人を悩ませしめり其後參詣は行きたる
 る者の運上を取立々れを西教門の人之と怒らざるを
 あらうりたる

茲にアーミンの人をペートルヘルミットといふ者あり
 少き力を兵卒ありしが妻の死せり世を棄てり
 山に入り此人不圖思ひ立つことありて耶路撒冷に
 參詣ふし其有様を見て怒り堪へず直に歐羅巴に歸

りて之を羅馬教公ユルバン第二に懇へ諸國の人を勸
 りて耶路撒冷を攻め取らしめんことを願ひたりに教
 公之を許せしむるにペートルを伊太利佛郎西二國を廻
 りて諸人を説き勧めたりに此國百萬の士も其言を
 諾したり

此時教公も亦諸國の高僧を會して之を議するること二
 度及びひぬ一度をフラスエンチヤに於てし再度のオー
 ベルンに於てせり然るにオーベルンの會に於ては教
 公彼ペートルと共に以前より烈しく耶路撒冷征伐の
 天理を叶ひたることを説きたりたりを之を聽きたる者
 皆其言を感し一聲に答へて是を真神の好む給ふ處に

かと呼びたり此戦争は内いんとつひし者との赤き十字の印を教公より賜りしは此日教公の説法を聴んて来りし巨萬の人よ此印を受くべしと歸りし人のありしとを時よ紀元千零九十五年あり

○第一の十字戦 紀元千零九十六年より千零九十九年に至る

始て耶路撒冷に進發したる兵を凡て三十萬人ありしとつへども壯士のうちにけづる婦女童兒病人に至るうで其中よ加りたりペートルワルトル人之を無錢の將と渾名せとつふ人と共に此兵を指揮し日身曼路を索めて進りたり然るに行と諸所を亂妨しりたれど匈牙利及びブルガニヤの土人怒りて屢之を襲ひりたれば其兵の剛

士但丁

即ち剛士但知腦布尔

に到着したるときを僅に打漏らさ

をたの

殘兵のあり剛士但丁帝即ち東帝アレキシス之を

ボスボリュス

海峽の名

邊に陣せしめしは其兵は此地よ

と又ニースに進み土身其人と戦て大に破らる逃け歸

りたる者ハ少くあり

然し耶路撒冷に進發したる兵唯此の如き者ありしは非

を整たる諸國の勇兵此地に内いんとて其用意を不

然し英王リヒュエスを各番よりて費の多きこと好ま

る日身曼帝顯理佛王費利布を教公と善らざるを以て

其勸めに従はざりしを帝王を一も此役は関りあり

る者ふし故に其兵をバックスロルライン公ゴットブリー

ポトプログの^{コリス}と總大将とふしノルマンデ公ロベルト。
 佛王の弟ヒューゴロイス公ステールヘンタレンチュア公ボ
 ヘモンド等諸侯之を指揮し其兵凡て五十萬餘
 ありきて諸將を兵と分て諸道より剛士但丁^{コンスタンチンブル}に集りボ
 スホリュスの海峡と渡りて一齊にニスに攻め寄せ五
 十日より之を落し其後又其兵ドリロームとい
 ふ處にて大に土丹其帝ソリマンの兵と合戦を此時
 の騎兵を十萬餘騎よりて或を曲まる劍を廻し或は輕
 き短槍と操りて味方の長槍を渡り合ひ互ひ勇を奮
 て戦ひ多るを前後例少き大騎戦ありしとぞ土丹其の
 兵ハ遂に打破られ争て逃げ散りしバ味方の兵ハ益

勇に進んでタウリュスの沙漠を打過ぎアンチオック^{ヨウロウ}に至
 り々々が路程渴して堪へざりたり或人の説は歐羅巴
 の兵會水に逢ひたるとき之を争ひ飲みり^{ヨウロウ}とぞい
 ふ多く飲みて立地は死者三百人^{ヨウロウ}と及びたりとい
 ふ
 諸歐羅巴の兵をアンチオックに攻め懸るは味方の人皆
 花よりき勇功を為さんとて互ひに競ひしが一日大将
 コットフリー^{ヨウロウ}一刀に敵の騎兵を兩斷せしは半身の河中
 に落ち半身を未だ馬上に在る^{ヨウロウ}走るを僧ロベ
 ルト側^{ヨウロウ}に在り直に筆を執りて云く一刀は一個の土丹
 其人二個の土丹其人とありと書き記すを最と

りぐらしし書様ありきても歐羅巴の兵ハアンチオク
 と攻むるといへども容易く落つべき様をありしう
 ぞ之を遠巻く圍こり然るに守手の兵も烏合のこと
 あれど互ひに不和を生むることあきましも、
 且つ兵糧乏しく冬の寒氣も烈しう、
 此城を圍こり幸よして城中の士官の我れ内
 通る者有りて味方を風雨の夜に引き入せしう、
 此城を取りしことを得たり敵將ケルボカ之を聞き直り兵
 を率ひて此城に馳せ来りしが味方の為は散りて
 破きて逃げ去り是に於て歐羅巴の兵を將ボヘ
 ンドと立てアンチオクの城主とあり

歐羅巴の兵をアンチオクに逗留すること數箇月後
 南の方耶路撒冷をきて出立を時其勢僅く歩兵二
 萬騎兵千五百に減たり此兵先づアクレといふ岩を
 取て後進むべきありといへども耶路撒冷に行かん
 と欲する情盛んありしう、
 アクレの城主と和睦を為
 して直り耶路撒冷に進むり、
 紀元千零九十九年
 に於て其兵遂に此地に到る騎士咸く馬より下りて素
 足となり城を拜し見て且つを悦び且つ哀れ各千行
 の涙を流し、
 頃しも夏の最中ふれど熱さの鎧を焼
 き貫くが如く河流を枯れそ一滴の水も、
 りくきりしが
 ゴットフリー等諸將を少しも臆する氣色なく
 凡て三十

五日の間晝夜を分たど苦戦しつれを遂に耶路撒冷の
 城を攻め落したり此時諸將を城中に集まり回々教の
 徒凡て七萬人を鑿よし且つ猶太教の徒を焼き殺しけ
 るとぞ假令他教を奉る者ありとも降する者と殺せ
 しを勇士と似がふま亦業ありと心づる人を識りけ
 り

ヨウロッパ

諸も歐羅巴の兵をゴットフリーと推して耶路撒冷の王
 とふしつらゴットフリーと謙遜して王の號を受つて
 自ら神陵君と稱しつらゴットフリーの位は即くや埃及
 王の兵とアスカロンといふ處にて合戦し大に之を破
 り是戦と第一十字戦の尾とふは此時歐羅巴の

将士の國は歸らんと欲する者をもふゴットフリーは別
 と告げて去りつら上はペートルヘルミットを
 前は敗北したるをも懲りて又ゴットフリーは従て来り
 しは是人も別と告げて其國は歸り「ヒュイ」といふ寺に於
 て身を終りつらとぞ

ゴットフリーを耶路撒冷の國法を作り程よく卒した

○第二の十字戦 紀元千四百四十九年 至り

諸も耶路撒冷の國をオスピタルレル「テンプラル」とい
 へる二部の僧徒興りて之を守りぬオスピタルレルの
 徒を皆緋色の外套と銀の十字形を縫ひ付たるを着

ザリ「テンフラル」の徒をもと九人の勇士の相誓ひて共
は身と脩め常は耶蘇教の敵と戦ふんとて同盟せしよ
且日くは社中に加ふる者益多く遂は強大あり一徒黨と
ありたりなり

第一の十字戦の終るより四十八箇年を耶路撒冷の
國は何事もあらずし然るに紀元千百四十六年頃は要
城「テッサ」といふ處モレユル公ゼンギの為は攻め取ら
まはり此事歐羅巴は関へるを容易事ありと
て歐羅巴諸國をして再び十字戦を起さんとぞ騒ぎけ
る
茲は聖僧ベルナルドといふ者あり此人を紀元千零九

十一年ボルゴンチーに於て生まざるとなり僧とふ
且後「パン」クレールボリスの高僧とありしよ
り速に節儉修行の名を顯はりたり其食せし物を粗薄
あり麩包胡桃并は木の葉ありたりされど顔色青ざり
身体瘦羸なりといへども精神を益盛んありたりも此
人を耶路撒冷の危きを聞て只管之を憂ひ紀元千百四
十六年ベゼレー山に佛國の士民を會して再び十字戦
を催まべしと説き勸めたりが數萬の人一齊に是を真
神の好む給ふ所ありと叫び此事第一十字戦争て十字
の印しを賜ふらんことを欲し其聲天地に響きまてまを
しと鳴りし止まざりしとぞ

西洋身知録 卷之四上 七 口所官文反

僧ベルナルドを又佛王路易第七日耳曼帝コンラート第三の二人を説きつゝ、つゞきも其言を感して之を承引き早速軍兵を催促を是に於て二國の王を凡て三十萬人許の兵を合せ日耳曼、匈牙利、路を索めて剛士但丁に到り海峡を渡りて亞細亞に進む第一十字戦の程と
同然に剛士但丁帝マニールを日耳曼帝を惡くその接路を斷ちつゝ、日耳曼の兵を容易くカパドシヤ山に攻めて土耳其人の為に打破せたり
去程は路易の兵を紀元千百四十八年の冬、メーンドル河を渡りて土耳其人と戦ひ少く利を得るに、ゲテオデセーといふ所にて大敗を取り、つゞき餘儀なく退

てアタリヤに籠らんと欲し、つゞき此城を既に土耳其に從ひ門を閉ぢて其兵を入さざり、つゞき其兵を再び憤發してアンチオクに内ひ、遂に耶路撒冷に到りぬ、此時日耳曼帝も兵を以て到着し、路易と共に耶路撒冷に入り、耶路撒冷の人を二國の君を迎へて悦ぶこと、疆もよく直に兵を出して其軍を接げ、ダマスカスと攻め、ゲリ、つゞき、つゞき、二國の兵を軍と止め、歐羅巴へ歸り、つゞき、是に於て第二の十字戦を花やうなる勝利なくして終まり、是より殆んど四十箇年を過ぎ、又十字戦起す

○第三の十字戦 絶元千百八十九年より千百九十二年に至る

紀元千八百八十七年土耳其帝サラヂン耶路撒冷を攻め取り是を奪へば八十八箇年の間寺院を建てたりける金の十字を道路に倒して行人の爲に踐む汚がさるる由歐羅巴に聞へられ諸國の人々大に怒り再び十字戦の用意を爲しよたり

其時許多の軍艦伊太利の港より乗出でて亞細亞に到る船中の兵卒はあつて上陸し耶路撒冷の人を耶路撒冷の僧徒「オスピタル」を援けてアクレを攻め圍むたり

去程に歐羅巴にてを英王リチャルド佛王ヒロップ日耳曼帝フレデリックバルバロッサ皆軍の用意をなす此時サラ

チンの税と名をて諸國の西教を奉る者を盡く租税を収立てる軍の入費を備へ諸國寺院をわめて土耳其人と斬りたる者を一生の罪科消滅して天堂を再生をべきことを説法しつるをぞ

紀元千八百八十九年英佛兩國の王を未だ出兵せざるに日耳曼帝フレデリックをラチスボントより出立し陸路にてアドリアアノールを押し寄せヘルレスボントの海を渡り小亞細亞を横行して土耳其人と打破りイコニウムを従へたりをわたりシリヤに進出しが此地に於てフレデリック疾に罹りて歿し其兵を一同悲歎に堪へざりしが互ひに諫めてアクレに内い寄手の

兵は加らりしなり

アクレは内ひありて皆百般の苦計をふるて此城を攻むとつへども容易に落つべき氣色もあらず身方數に敗北し死傷算へ盡さるべきにても歐羅巴より援兵の到らんこと頼んで皆少しも辟易をすることなく之を圍むこと殆んど二箇年及びびたるが敵もさう日々に兵を増して固く此城を守りたり

紀元千九百九十年英佛兩國の軍兵船路して耶路撒冷に内ふ其兵合して十萬人ありて兩國の兵を悉西利にありしナ城に止りて冬を過ぎしなり英王を又ロープリス島に止り此島にありて夫人を迎へ且つ其島の王

イサークを廢したり是等の事よりて英王を暫らく此島に逗留しなれど佛の兵先づアクレに到り程よく英の兵も到着せしむるがアクレの寄手を大に勢を得直にアクレを攻め落したり敵の國帝サラヂン此有様を見て驚き憂ふとつへども性質の美しき人なれど聊かも怯ま行跡を為さば英佛兩國の王帝と熟と病と陣中を臥する由を聞きサラヂン數梨又を雪と贈りて其病を訪ひたりとぞアクレの落しめらサラヂンを兵と引て南地へ退きたり

凡て十字戦の譚を小説めきたる勇談快話多きを以て人其軍の非に心を留る者少し夫れ十字戦に加

ヨロシタル者多くを歐羅巴の兇黨として神を尊む心を
 おく大概皆名利を得んと欲する徒のそふねを旗章劍
 楯外套等盡く教門の印しを帯びたりとつへども其心
 敢て教門の旨に従ふべからざるが故に皆百般の惡業
 を行ひ廣耻を知らざる行跡多きを驚くは足らざるこ
 とありべし

アクレの落し後程なく佛王を歐羅巴に歸せしむるを英
 王獨り南の方より兵を進め十一日の間行合戦しジョツ
 パアスカロンの二城を降し遂に耶路撒冷と距ること
 二十里の地に至り此時英國に謀反起り且つ兵を減し
 同盟の諸侯と不和ありしを以て英王を國に歸しけ

るが途中はあつて澳土利公の兵を捕へらる獄中に繫
 らるる時、紀元千九百九十二年あり英王を獄に在る
 こと殆んど二年よりして稍く免せぬ（委しくを英國
 史畧に見ゆ）
 英王耶路撒冷を出立しより此十字戦ハ和時とふ
 べぬ其翌年土耳其帝サラチン殂しむるを又耶路撒冷
 に戦起るを次篇に分解するを見て知るべし
 初めアクレを攻むるとき義士三四人相誓ひて病むる者
 及び疵を患る者を引き受け之を救ふんと義を結び
 しが其社中に加ふる者多く後一大會社とありたり
 是を「セントニック會社」といふ

第二篇 十字戦の事前章の續

○第四の十字戦紀元千九百九十五年より千九百九十七年に至る

前章よりつへる澳土利公日耳曼帝とありてヘンリー第六と號を此ヘンリー竊る剛士但丁の國を并せんと欲しけれど悉西利を取て其縁索と為さんと思へりさきど白地ひらきは斯くを言ひ出しがたを以て第四の十字戦と起さんと號して軍兵を催促を

ヘンリーと兵四萬を分て自ら之を指揮し悉西利の秘策を行くと謀り其餘の兵を二隊とふして進まむ一隊を多腦河と渡りて剛士但丁の都に入此國の船を借りてアクレは赴きたり又一隊を波羅的海

の港より出帆してパレスチン耶路撒冷を即ちは内ひしがい中ぶ此地は到着せむ

然るにパレスチンは西教の徒を稍く國の太平を得たるを悦びたり折あらしむを歐羅巴の軍兵今又來りて戦争を始るを見て竊るは物憂く思ひしが此時土耳其の方までも兵を起して直にジッパ城を攻め取益兵を進めて押寄せむれどパレスチンの人を大に驚ま初め歐羅巴の兵を惡しく待ちたるを悔ひ其兵と一致して猶又海路より來る歐羅巴の兵をも待ち受け其兵と合してベリキウス合のベリキウスに向ひ直之を攻取るる先年の戦争中敵の俘とありたる者九千人許

り久しく此城の牢獄に繋ぐれしが皆是に至りて免る
ことを得たり

去程日耳曼帝ヘンリーを悉西利を打ち靡け又一隊
の兵をパレスチンに送りしうがパレスチンの人々を
大に勇む此人數の甚多し土耳其人を耶路撒冷より追ひ
拂ふんこと何の難きことと云ふんと悦びたり然れども
時侯の寒氣は内へりて以て皆々狐疑していざ其地
に進まば海岸の一城トロンに攻め寄せありて日
耳曼の兵を隧道を穿ちて地下より城壁を振ひ動かし
るれども今も城壁を崩るべく見へるなり此時城兵
大に恐も降服赦罪を乞ひたり日耳曼の兵之を許さ

せりしうが城兵を一同に死を決して防ぎ戦ひたり
仍て戦争の様大に變し味方少しく負色とありたり
處に敵の援兵近り寄せあり風閃頻りありしうが味方
の隊長を恐みて夜中に逃げ去りたり其翌日城兵を味
方の陣中混雜するを見其虚を乘りて散りて攻立てけ
るを味方の兵を取る物も取りしうが狼狽してテール
まで敗北したり

此時日耳曼帝ヘンリー殞落せりパレスチンに出張し
ある日耳曼の兵之を閉きもその賞を出さばき又ふま
るはうで軍と為さべらんやとて皆々國へぞ歸りけ
る是に於て第四の十字戦終る

○第五の十字戦 紀元千九百九十八年より千二百零四年に至る

羅馬の教公インノセント第三又十字戦を起さんと諸國は觸まらざり然も諸國之は應をる者少く中にも佛國を教公の責めを蒙りて國中停止せる折ふをば一人として其命は應をる者なし譯者云く此項教公の勞を盛んなくして諸國の王と

つへども其旨は君と逆ふものやをば之を罰せんとす

まを臣も之を君と逆ふものやをば之を罰せんとす

ことども得た此罰を英語を「エキスコム」ニケル

ヨンの罰とりの教公と一國を罰して寺院を鎖さし

め祭りと等と止りしむることの罰を「インテル」チク

の罰とりのこととき佛國をこの罰を蒙りたるあり

茲はマル子河の邊りある一小邑の僧はホールクといふ者ありしが佛國士人の大に會せしとき度量り其場は趣きて辯舌を振ひ十字戦を説き勸めたるにふく

其理は服し争て十字戦の兵は加らんと罵りけりしこと恰も響の物に應をるが如くあり

諸佛國佛の國人の多きを以てを伊太利國ベニースの君は船を借らんことを頼み且つ諸軍此地に集らんことを定めたり然し集會の日限をば此地に集らざる貴人を甚だ少ありしを以て船を借るは相當の價を償ふこと能はざる皆之を當惑しけり初めベニースの属城ザラ謀反しけり此ときベニースの君を貴人等と内ひ船賃の代りに此城を攻め取らばしとの頼みは應りて佛人等を一齊にその城に攻め寄せ僅に五日にして之を降しけり時紀元千二百零二

年あり

茲又剛士但丁城^{コンスタンチノプル}を帝の弟アレキシユースとワム
 者帝イサークと廢して其目をとめまき^ルを帝の嫡
 子^{此人も中々アレキシユースと混じりて讀むべし故に上はアレキシユースと}
 と畧せり^{今その名難と避けてベニースに至り佛國の士は援}
 けを求めり^{佛國の士或を直マパレスチンと赴らん}
 とワム或を東帝の嫡子と援を與へんとワム者ワム
 て評議區^{オタク}ありしが遂は援を與ふることと決しべ
 ニースの船は乘て剛士但丁に到りたり
 諸も佛國の兵を亞細亞の海岸に上陸しスクタリ城に
 屯し直は度平らふる船許多を用意して各之馬を

載せ皆槍を携へて船上に立ちりし水主は命して
 其船を漕ぎ出させ恙なく海峡を渡りて剛士但丁の海
 岸に着きたり此ときベニースの船艦其港の入口を
 支へる鉄の網を切り放ちられれば佛國の兵一度に
 剛士但丁城に攻め懸るアレキシユース之を防ぐこと十
 一日及びばりしがもとや防ぎがしとや思ひらん盡
 く城中の金銀を集めて懐しつぐくへり出奔せり
 時は紀元千二百零三年あり此時の戦ひはベニース
 の君帝は先登し頗る武勇を顯はしりしとぞ
 諸佛國の士をイサークを帝位に復しりしが後やどふ
 く剛士但丁の土人と佛國の土人と不和出来て再び闘

とある佛國の士遂に勝利を得しがイサークも其嫡子も戦争の最中身罷りしうぞフランドル公バルドゥインと立て東帝と稱せしめ此國の四分一と與へ其餘をベニースと佛の諸侯とて領ち取りたり

○少年の十字戦

中古に當りて最も奇と云べき事件の一を少年の十字戦あり

項を紀元千二百十二年のこととよへンドームの牧童ステールヘンといふ者十字戦を起さんとて十二歳許の童兒を集めりしが佛國の童兒男女とあく其父母の泣き諫むるとも聽ま入さば争てステールヘンに従ふ

不ぞんステールヘンの童兵遂に三萬人と及びぬ其兵皆神を請り服を着し手よを蠟燭を持ち口よを歌曲と唱へてプロヘンスと打ち立ち途中さゆるの艱難に出逢ひしが互ひは励ましと云く我等が信心とを神も隣をよ給ふべしと海の水も自然と乾きて我等の耶路撒冷へ赴くべき路自ら開くへしと童心の愚るものふまこと誠樂しと進み行きて遂に地中海の邊りよ来せり爰に慈心深き二人の商人童兒等を見我等が船を以て耶路撒冷へ送り得きと云ひしを聞きし難風は七艘の船を棄らしめり然る小海上にありて難風は遇ひ二艘の船破損し此船を棄りて童兒を盡く溺せ

て死を其餘の五艘に乗せる童兒を挨及^{アヒク}又着し件の商人の爲に盡く奴を賣らむを然し惡業の天罰忽ち報ひ來りて此商人を悉^{シテ}西利^シ又あつて誅戮せしむとぞ

○第六の十字戦紀元千二百二十七年より千二百二十九年に至る

紀元千二百十九年西教の徒ダミータを攻めしが大敗北しあり

其年より千二百二十七年に至るまでパレスチンに事ふし此歳日耳曼帝フレデリック第二羅馬教公グレゴリ一第九の勸めに従ひパレスチンに出帆せしが軍兵の中に不平の者多かりしを病^{或云得たり}と云ふレ^レシキ不意と

帝を已むことを得ずと解^ときし日より僅^僅るは三日

して其船を返して國に歸りしを教公を怒りて帝を教罰^{英リキ}ヨシ^コリ^コニ^コ見^ニケ^シと加へり千二百二十八年フレデリック帝又兵を擧げてパレスチンに進發を

此時に及て羅馬教公の怒り尚解けざればパレスチンの僧徒は布告してフレデリックと接くは^{エガプト}命にあり然るも帝を英智の人ありしは埃及回王^{エマレツ}キカミルと深く交りて遂に和睦を結ひりしより耶路撒

冷ベトレム其餘ジッパよりプロレノースに至るまでの諸邑盡くフレデリックの手を渡さる西教を奉むる諸國の人を之を聞て悦ばざるをふしと^レも僧徒を皆之

と悦びざりし

皆もフレデリックを「エリートニック」會社の義士と共に耶路撒冷に入り耶路撒冷王の位に即ぐせしが禮を助くる僧ありしを以て自ら冠を為されたり時二千二百二十年ありフレデリック耶路撒冷に在ること久しうざりしは羅馬教公歐羅巴よりフレデリックの地を侵さんと量りねどフレデリックを急ぎて伊太利に歸りたり

○第七の十字戦

耶路撒冷又回く教の徒の為に取をしうバ佛王路易第九^{セントルイス}の^{聖路}大軍を起して佛の濱より出帆せられたる

と其の諸船の人皆教門の詩を唱へり征伐の首途を賀せりしは第七の十字戦あり

路易をシープリス島にて冬を過し春を待て又纜を解きダミータの前まで到りて碇泊し海邊に多くの敵兵陣を布き身方は内ひて射る矢を雨のごとし此とき路易自ら諸士に先立ち劍を振て海中に跳入り諸士を励まして陸に押し上り敵兵を攻め立てれど敵兵の辟易して逃げ去りぬ是よりダミータを佛の兵は降

路易の軍中の疾病を得て死するもの多かりしは人数を大に減しぬれども路易を恐るること多く兵を進

けてマンソラに至りたるに敵兵不意に突出して
 路易の陣を討てり路易奮戦して遂に之を破るも
 も其弟を始め許多の勇將を討せり然れども今と進むも
 勝を制ししごとしして其兵を整へてダミータを指して
 退りしガミニールと云ふ村に至りたるに敵の伏兵
 に逢て散るに敗北しり此に於て路易を逃り暇有りし
 とつへども其兵を棄てり身と逃るに忍びだして一歩
 も奔ることありしりど遂に敵の虜とありし時、紀
 元千二百五十年あり後路易をダミータを敵に返し且
 四十万金を與へんことを約し稍く放りて歸りしが
 尚、國へと歸らば四箇年の間アクレに滞留し再び事

と擧んと謀らるるに此に於て母の身罷し由因へり
 路易を餘儀なく佛郎西へ歸りたり

○第八の十字戦 紀元千二百七十年より
千二百七十二年に至り

そ乃より十六年の後佛王路易又兵を擧げて亞布利加
 に到り兵力を以てエニス王を西教に變せしめんと謀
 まり此とき敵兵を容易く打破り多れども疫病大に
 流行して軍中病まづる者少く佛王も之を病で終り
 没したり

英國の太子義都華 後義都華第一 兵を率ひて亞布利加に到
 着しりが路易既没しる由を聞き即ち其兵を以
 て耶路撒冷に向ふ此とき義都華をへニシヤに進みナ

ザレツマカカテ 田々教の徒と盛殺し多し 義都華ハア
 クレ陣せしが刺客の為め傷けりしバ大勢
 ひを失ひ英國は歸りたりその後十字戦を起せしもの
 ふし
 耶路撒冷田々教の徒は取らせしより西教の徒をア
 レと東方の據り處とふしりりガ紀元千二百九十一年
 に至りて田王カリルの兵アクレは攻め寄せ之を圍む
 こと三十三日及び器械を以て遂に其城壁を打ち碎
 き一齊に攻め入りしをアクレを容易く落城しり
 此を殺される者と虜とありて奴僕に賣きりる者
 と合て凡て六万人僅に之を逃きて船に乗るはあり

者も大半を溺きて死しりりとぞ淺増しりりし事あり

西教を奉せし耶路撒冷王即位の表

王の名	紀元
ポログ子のゴットフリー	千零九十九年
バルドウィン第一	千百年
バルドウィン第二	千百十八年
アンジューのホルク	千百三十一年
バルドウィン第三	千百四十四年
アモリー	千百六十二年

バルドウィン第四	千百七十四年
シビル	未詳
シビルの子	未詳
バルドウィン第五	千百八十五年
ゴイ、ド、リュシナン	千百八十六年
ジャンパンのヘンリー	千百九十二年
アモリー、ド、リュシナン	千百九十七年
ゼア、ド、ブリアン	千二百零九年
日耳曼帝フレデリック第二	千二百二十九年
至紀元千二百三十九年耶路撒冷為回教徒所滅	

第三篇 アルビゲンス人の事

要紀元千二百十三年シロトと合戦
 第三千九百十八年教公と為りては羅馬
 教公の權勢極りて盛んありしを英王ジョンを其威を
 恐むて代々羅馬教公の臣僕あることを誓ひたり然
 るに佛郎西の南地はアルビゲンス人と名つけたる一
 群の人其のりて教公の門に從はざりて其をシロトセ
 ント之を罰せんと謀り余其事を以て茲に説く
 アルビゲンス人をラングドック^{佛國}あり葡萄酒の多き地
 に住る民より其使ふ所の言葉をフロレンス語を用
 ひあり其民皆冷冽多れを僧官の行ひ惡きを見之を

輕じりて實に此項の高僧を位貴き狗黨として其僧は
 後せりて小僧を無学の村漢ありしとぞきむを其民
 と羅馬の教を從ふ自ら一派の宗旨を作して之を
 と信じて他宗の人とい言語も交へざるなりと
 其宗旨を古の「マン」宗善慈二神ありてと教ふる宗旨も似るれど
 西教の旨は違へり所りといへども西教の真意は適
 ひたる所も多うりねど羅馬教公の説きし西教
 と此をば却て正しうりしといふ之を奉る者ハ木
 像を拜せば華美の僧服を厭て總て飾らざるを好む經
 と載るよを屢未ある机を用て立派ある臺に却て神の意
 と背くとつり其人皆麁食して身體を練り斷食ふども

數之を為しつるとぞ
 教公インノセント之を惡し其為を牙を窺ふが為僧
 と贈り遣はしつる蒙其僧の一人トローリス公ライモ
 ンドの臣是世別ちアルビゲの名ありが為めは教さねり是を
 ぞ宗旨軍の基ある時、紀元千二百零八年のことあり
 是時西班牙の僧ドミニク、グスマン。教公の為めは辯舌
 を振て佛入を説きアルビゲニス人と征伐することを
 勧め又皆教裁判所を取建て其黨を誅戮しつる是を羅
 馬皆教裁判の始めとして紀元千二百三十三年教公グ
 レゴリー、第九在位の時に至り教公の命令を以て其裁

判所と諸所を設け置くことあり伊太利是班牙等の
羅馬教は背く者を盡く其所をあわて焼戮せしむ第十
八紀の末に至りて此刑稍く止む

諸も佛の又くを僧グズマン等の為めは勵すは我も
我もと争てラングドグは打内ハローン河の谷を下り
て地中海の濱の方より此地を攻め入りたり偏鄙の民
も之を関き棒又を鐵を提げて其兵を従へり其兵皆十
字の印を胸に著けたり是をアルビゲンス人をして以て西
教の敵とふし之と戦ふことを回く教の徒と戦ひし
と紀の如く思ひたりはどあり但し回く教の徒を攻しと
きを胸に著けたる之を肩に著けしとぞ

トローリス侯を之を聞て大に恐を直し教公の使僧又
歎願して罪を謝しはらるるが其甥はライモンドロブル
とのへるを教公は降ふことふく其兵を二手に分て之
をベジールカルカソソ子の二城に置きカルカソソ子
の城を自ら之を籠まりさせベジールの城兵を城を
出て寄手の兵と奮ひ戦ひしうども寄手を極めて多勢
ありを容易く之を打靡け勢を棄て遂に此城を落しけ
る時は紀元千二百零九年あり教公の使僧アルノルド
アマルリック諸士は觸れし城兵を殺せよといひしとき
諸士問て城兵は羅馬教公の教を背く者なりと實に
之を従はざる者ととりまへき如何し之を區別せん

やとつひしがアルノルド答て然らるを盡く之を救ふべし神自ら其忠臣と其敵とを區別し給ふべしといひしを驕慢とやいふん慈悲ふしとやいふん嗚呼之を以て羅馬教公の教惡うしと見るに足る此を殺しる者六萬人城を之と焼き拂ひたり

カスカソン子を固く守りて降らざりしが水又之しきと以て今を詮方ふらんを長九里の地道を掘て城兵皆逃げ去りたり時大將ライモンドロシル獨り敵を降すて獄舎に繋るること三月より遂に死せり其領地を教公方の勇將レーセストル侯シモンドモントルホルト盡く之と掠奪したり

紀元千二百十年の夏モントルホルトアルビゲンス方の堅城ミ子ルと攻む城兵固く守りて七週日又及びたるが水乏しくありたりを遂に城を開て降参せり然るにモントルホルトを羅馬教公の教えを遵奉せど命を免さんと城兵又云ひてしきたるが城兵を我宗旨を棄て羅馬の郡教又徒らんに死んじとて敢て徒らにを遂に焼くを死したるを哀をふりたることどもふ

凡此とき死せり男女凡て一百四十人

モントルホルトの兵をラングドックを横行して之を亂妨狼藉すること大方ありたりとぞモントルホルト又ラバロール城を囲む

此城をトローロースを距ること十五里ありアルビゲ
 ンス人皆逃きて城中は匿まらるるむづのモントホルト
 等をこの城を以て背教賊の巢穴ありと唱へ五千人の
 兵を以て攻め寄せたり時は紀元千二百十一年あり此
 城を攻るに當て寄手を城壁を打ち破るべき奇異あり
 器械其名をカガを用ひるも濠ほりなりて壁は達せしむ
 ることを得まねどこの濠を埋めしめらるるが城兵地道
 より出て又土を浚さひらるる由て兎角寄手を其意を得
 ること能よかりきモントホルト之を憂ひ火薬を放て
 城の地道を塞ぎし件も器械を自在に働かしめしむるを
 稍くして壁の一部を打ち破るなり寄手の兵其處より

一齊に攻め登り遂に城を落しり此とき虜となりて
 焼殺されし者幾百と知らる

さてモントローリス侯ライモンドとモントホルト等の
 勢ひ益々烈しきと見て之を憂ひ稍く心を戦ふことなれば決
 してアラゴン王ペドロと同盟し紀元千二百十三年に
 レットはあかてモントホルトと合戦せりトローリス侯
 又敗北してペドロを討死しり是はあかてアルビゲ
 ンス人を辟易し再び起るる及るに皆降参しりしむ
 モントホルト等兵を引て各其家へ歸りたり

紀元千二百十五年佛王ヒックファオギュスタスの子路馬
 又アルビゲンス人と征伐し六週日の間ラングドックを

亂妨せしがモントホルトを自ら平定しありし地を亂
妨せしむるを見て大に憂ひ路易^{ロイス}を勸りて早く兵を引
擧げしめしむ時モントホルトの領せし地をトリロ
イスナルボン子の二城を以て都とふせしとぞ二城を
即ちランゲトックの堅城あり

紀元千二百十八年ライモンド^{即ち以前ウロ} 竊うまト
トホルト之を聞てトリロイスを攻め寄せしが城中よ
と救はるる石の中て死しむる
軍を内^内已^已ま^まして連年ライモンド等アルビケンズ人
と教公方の兵と合戦しむるが千二百二十二年より

てライモンド病死せし頃よりアルビケンズ方を勢ひ
大に衰へしむるをライモンドの子ライモンド第七遂に
盡く領地を佛王^{フレンス}に獻じ其部分を佛王より受納め其
諸侯とありしを至りぬ時^{フレンス}紀元千二百二十九年あり

佛郎西^{フレンス}カペット朝諸王即位の表

帝王の名	紀元
ヒュ ^{ヒュ} カペット	九百八十七年
ロベルト第二 ^(ルサージ)	九百九十六年
頭理第一	千零三十一年
ヒル ^{ヒル} フ第一	千零六十年
路易第六 ^(ルグロ)	千百零八年

路易第七 (ゼヨング)	千百三十七年
ヒリツフ第一 (マオギユスチユス)	千百八十年
路易第八 (クールドリオン)	千二百二十三年
路易第九 (即ち聖路易)	千二百二十六年
ヒリツフ第三 (ゼハルダ)	千二百七十年
ヒリツフ第四 (ゼヘール)	千二百八十五年
路易第十 (ヒューナシ)	千三百十四年
ジョン	千三百十六年
ヒリツフ第五	千三百十六年
查理第四 (ゼハンドソム)	千三百二十二年

西洋易知錄卷之四上畢

